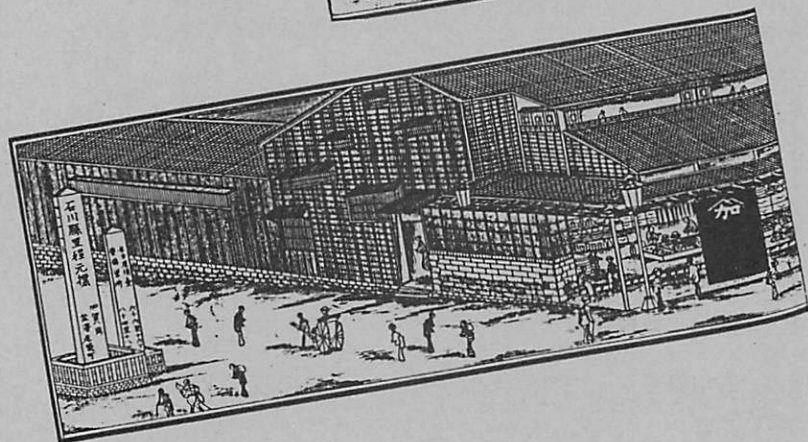


老舗の街・尾張町シリーズ4

老舗の語る尾張町今昔 前編

歴史と伝統に新しい意味を求めて



目 次

「おやま」といわれた金沢	1
前田又左衛門利家公のこと	1
尾張町を起点とした江戸三度・京三度	2
黒梅屋平四郎とは	3
尾張町町観要録を読むと	3
大手門・黒門の位置づけは	4
下尾張町と上尾張町	5
明治・大正時代の尾張町町並	6
明治の石川県下商工便覧にみる尾張町	6
あとがき	8

表紙題字 松田平四郎氏

表紙絵 石川県里程元標界限の商店風景(石川県下商工便覧より)

尾張町の歴史と町並を語る

「おやま」といわれた金沢

尾張町を取り上げる時、まず金沢はどうして出来たのかということになりますわ。物の本にもよりますが、本源寺という寺が「おやま」(御山・尾山・小山か字は不明だが)に在り、その山が急に出っ張った処が後から金沢城になるんです。私らの小さい頃(松田平四郎の生まれた明治四十年代)は田舎から来る人は皆金沢のことを通称「おやま」と言っていましたわ。その当時は耳で聞き、言葉でしゃべるのが主なもので、御山・尾山・小山のどの字を書くのかという漢字についてはあまり喧しく言わなかったし、又読み書きを知らん人が多かったんです。この本源寺が今の金沢城の二の丸か三の丸付近にあり、門徒衆が集まり信仰の対象となっていたわけです。

ここで当時の人の心境になってみると、現在程遊びに行くところもないし、国家公共機関というものもはっきりしてなかったし、第一、福祉というものにもほとんど配慮されてなかったわけです。川はあっても橋がない、道は獣道[けものみち]の後に人が踏み固めて行くだけのもので、自然なりふりのまま何となく出来上がったのが金沢の町です。だから意図的に人工の手を加えるということがあまりなかったのです。

前田又左衛門利家公のこと

天正十一年、前田公が金沢に入城した時に一番目についたのが、城郭を早急に構えるということです。石垣を築き、材木普請をし、壁を塗り、鉛の瓦を葺いて何とか姿にはなりました。だけど百間堀はひっついてしもうておって、あそこは今の兼六園と同じ高さだったわけです。そこで侍普請というて、侍に突貫工事をさせ、百間の堀を作ったのが現在の百間堀です。これが初めて人工で出来た堀で、その他県庁の裏、尾山神社の裏を少し掘り出し、又大手堀、白鳥路の付近を掘り、やっと城の格好が整っていったわけです。そうした公共事業を行うことでちょっと格好をつけたんですが、まあ加賀百万石の体面を保つ程

度のもものではなかったといえます。

一方、金沢城は守りに強い山城ではなく、安土桃山城から時代の流れとなった経済交流優先の平城であったわけです。ただ、ここで何故に前田公が金沢の地に来たかということを考えると、東海道側の信長・秀吉の上杉謙信への押さえとしての意味合いが強いのです。それ程上杉謙信は恐れられていたし、逆に前田公がいかにか信任されていたかが伺われるわけです。その期待に答えるべく、又左衛門利家公は北陸の雪を通じた構えをどうするか、又東西に分割する以前の本願寺の支坊である本源寺の強い勢力をどう利用するかに憂慮したようです。徳川時代に入ってから本願寺は家康により東西に分割され、加賀は「お東」になるわけですが、ここに至る経過は並大抵ではありませんでした。寺町の設置や後の金谷御殿建設(藩籍率還で前田家始め日本中の大小名が東京に居住し、新しく官制知事が石川県を統治する際、明治四年ここを尾山神社として残したも)など数えればキリがないといえましょう。

尾張町を起点とした江戸三度・京三度

商人の町尾張町はその経済効果を得るために、非常な情報収集を行っていました。その現れが江戸三度・京三度といわれるこの飛脚制度です。三度というのは月に三度江戸や京都を行き来していたわけですが、関所を加賀藩の全面的信頼を背景に通るため、大変な責任があったのです。最初は四日、十四日、二十四日と定まっていたのですが、後には月六回程に増え、藩の急用ある時や藩士の依頼ある時は別に仕立飛脚便を発するようになったといえます。

主な仕事は、書状と小包を持って江戸へ走る、又京都へ走ることで、天下の実力者である将軍及び日本の象徴である天皇の情報を表立って得ていたのです。極論すれば今の外交官のようなものといえましょうか。それが民間で、しかも尾張町の商人が束ねていた(四～五人の合名だった)ということをお忘れちゃいけませんよ。元禄十三年には藩用の荷物一貫目を無賃輸送すべき義務を負っていたということが単なる商人の営利だけではなかったことを示しています。

具体的な場所は、現在の石黒ファーマシーにありました。

黒梅屋平四郎とは

文化の始め頃に黒梅屋として商売を始めたようです。今校内記(前田綱紀の家臣)という一万石の家老(金沢では八家衆という)に奥向きの御用として仕えた二十人扶持の松田左膳に始まるとされます。子供がなかったので越中から染物をいささか心得ていた八郎兵衛を養子に迎え、出仕を辞して染物屋を始めたのです。そこで、封建時代というものを考えてもらわなければならないのは、絵の具があそこの家へ行けばすぐ手に入るとかいうものではなかったのです。まず原料から自分で工夫して作らなければならなかったのです。

黒梅屋という名の由来はこのへんにあるようです。ちその葉を入れず、梅実をいっぱい摘んで塩漬にするわけです。そしたら赤くならず黄色い梅干しが出来、梅酸となります。次に火鉢の灰を集めて水の中に入れると炭酸カリウムが出来、これに茜の根を入れたりその他いろいろ入れて御国染めとなります。この御国染めとは女子供が着るものではなく、侍・士大夫が着る袴・紋付き・袴に色を染めて当時の礼服としていたのです。関ヶ原の頃までは武士は何を着ていてもよかったんですが、寛永以降は徐々に文化方面でいじっかしくなり、服装が人間を位置付けるようになったわけです。この格式を現して行くことから染物が始まったわけですが、今の友禅染などももっぱら女物に使われていますが本来男物だったことがお分かりかと思えます。そうした状況のもと、ハケも作り、山から草木を担いで来て煮たり焼いたりして一反を染め上げるというのが黒梅屋だったのでしょう。当時はどここの染屋でもこのような有様の筈はずでしたよ。

その後染物をやめ、ハケから筆を扱うようになり、松田文華堂今日にいたるわけです。平四郎の名は三代目より世襲となったんです。

尾張町町観要録を読むと

「尾張町私共組合の内、何の誰それ家、間口何間、奥行き何間……町並の通りただいま何町に……」などと始まる家屋売買の納得条。「まかりある候処

何分かれより申す者あり、かい申しにつき総宗吟味仕り、よって一向宗の寺は安江二町の専光寺の旦那にてござ候、キリシタン末類のたぐいまでござなく候につき、諸事請人これあり候、売り主この手前吟味仕れども……組合納得の条の件。御奉行所、右の通りこれなく候]など当時のお上へ届ける書類のひな形が、この尾張町町覬要録に書かれてあります。まあ、前田藩当時の組合頭の役割を現すと共に、時には代書人のようなことをしていたようです。後見条の事。譲り条の事、譲り請け条の事。これらをもとにして文化九年に尾張町組合頭だった四代目の松田平四郎が書類を書いて御町奉行へ出すわけです。

一般庶民がほとんど読み書きが出来ず、商人でもごく限られた人々以外は文盲が多かった頃ですから、きちんと書類を作れるということは大変なことだったんですよ。又、そうした書類関係のひな形を作っておく程多かった尾張町はやはり格式があったんじゃないですか。

大手門・黒門の位置づけは

現在の博労町の交差点から金沢城の方へ向かって突き当たった門が「黒門」といい、当時の通用門だったんです。その左側、白鳥路の右横にあるのが正門になる「大手門」です。これはもうみだりに開ける門ではありません。参勤交替の時に城主が自ら出入りする場合や、徳川の正使の来城の場合とか、京都のかしこき処の人の関係とか、とにかくこれを開ける時はもう大変なもんやったんです。今、兼六園の前で金沢城の正門みたいな顔をしている石川門は、裏庭(兼六園)へ通じる裏門にすぎなかったんです。まあ観光客はいざ知らず、少なくとも金沢に住んで、しかも尾張町界限の人はこの事実をわすれちゃいけません。

黒門から尾崎神社のあたりが御町会所(金沢町奉行の役所)であり、行政・裁判から政治経済の全てが町のことであったんです。今でいえば官舎街とでもいいますか。尾張町というのはあの辺が行政の府というので重きを置いて位置づけられておりました。ただそれは百万石の行政府という意味でなく、金沢という町だけの行政府という意味あいだったんですがね。だから金沢市役所と警察と裁判所を一緒にしたような権限を持っていたんです。それに藩札の正貨(小

判)との引換あるいは大阪・江戸との為替業務という重要な仕事もしていました。

下尾張町と上尾張町

尾張町はマス目のようになっており、ここだけが京都と同じように区画整理が出来上がっていたということは、前田公がそれだけ対外的に立派にみさせていたかったわけです。大手町は名のごとく金沢城の正玄関だから北向きに行政の窓があって、その横にくっついて御町会所がありました。だから、自然とこの界限に来なければ、政治的ないろいろな話や、経済的な話が出来なかったようです。物をたんに売るというより、情報交換と許可認可制の中心が尾張町・今町周辺にあったので、ここに人々が集まって来たのです。今町は当時、主に宿屋町(上今町・下今町共)でした。尾張町の方はすでに商店街としての構えがきちんとしていました。

特筆すべきは大手門から中町(NHK金沢放送局前付近)を通り、尾張町に出て右へ曲がって枯れ木橋を通り、懸作り(橋場町)に至る道筋が昔の表通りだったのです。一方、黒門から出て博労町を得て尾張町から懸作り(橋場町)へという道筋がありましたが、こちらは氏子も違うし、通用門からの出入り人ということで格式は一段下でした。大手門から出て尾張町にぶつかった処から、懸作り(橋場町)側が下尾張町[しもおわりちょう]といわれ、武蔵側が上尾張町[かみおわりちょう]といわれてました。

そしてこの表通りに当たる下尾張町は参勤交替の正式な道筋であるため、こちら側だけ雑用[ぞうよう]が掛かってくる程だったんです。それは、お殿様お通りのために家の前の造りを良くしておかなければならんためです。例えば、冬になったからといって軒下に大根を掛けたままにしておくとか、傘屋が和紙に塗った油の臭いのする作りかけの傘を店先に放り出したままにしておくとか、臭いのするものや目障りになるものは下尾張町では置いてはいかんということが不文律になっていたんです。だから尾張町の中でも下尾張町は藩政時代は別格としての格式を持っていたのです。

この町が上・下に別れていたのは、尾張町の他に先の今町と新町があり、どこも大手門の前からそれぞれ町が別れていました。尾張町は現在では上下には呼ばなくなっていますが、今町・新町はそのままに呼ばれています。

明治・大正時代の尾張町町並

現在と違って完成された商品ばかりを扱うのではなく、ほとんどの店が自前で商品を作り出しており、お客にとっては自分の買うものの生い立ちが分るといふ情緒が残っていました。又その使い方も、決して使い捨てることなく、何らかの再利用をするという慎ましいものでした。

私(松田文華堂)のときの筆や染め物・絵具材料もしかり、合羽なんかもそうです。合羽は浅野川へ朝の四時頃に行って、和紙に桐油を塗ったものを漉いて、雨しのぎの油紙としていたものを店頭で並べて売っていたものです。だから昔、浅野川で朝の早い商売というところ、この合羽屋と同じく、油を塗っていた傘屋、それにたまに友禅が流れているというのが風情だったんです。ただ、河原に傘を広げたといってもそんなに長い時間干す必要がなかったようです。合羽にしても河原で何もかもするのではなく、汚いので河原で油を塗って、実際にはそこで広げず店へ持って帰り、風の当たらない処で自然に乾燥させたのです。

子供の頃に遠足があると、普通は弁当箱を油紙で包み(保温効果もあったので)それを風呂敷に入れて背中に担いで行ったものです。その時雨が降れば、油紙の合羽を出して羽織ることだったんです。店へ合羽を買いに行くと紙何枚張ったのが幾らという売り方でしたしね。又、雨が降らなければ、尻の下に敷くには実に都合の良いものでしたし、使い方もいろいろに工夫してました。最後にだんだん年が経つと、黄色から赤っぽくなって細かくヒビ割れたようになるので、森八のお菓子などを包んで東京や大阪の知人へ小包を送る梱包紙にしたものです。とにかく、物を捨てるということがなかったですよ。

明治の石川県下商工便覧にみる尾張町

明治維新は全てにおいて新しい様相を帯びて来ることとなります。新政府の太政官通達により、今までの神仏混淆が廃止されて神社と寺院への急激な分離が行われたことで、人の心にも大きな変化が生じたのです。それは西洋合理主義の崇拝と実施といえますか。

石川県里程元標前の河合洋品店と三田[みつだ]商店などが、中でもいち早く時代の流れを捕えてハイカラ商売を始めたんですね。ちょうど明治十一年九月の明治天皇北陸ご巡行が尾張町の町並を競って洋風に変えることに拍車を掛けて行ったといつて良いでしょう。明治二十一年のこの冊子をみますと、森八、森忠商店、山田時計店尾張町支店、向田商店、高橋商店、細宇印房店、高橋眞座店、松田文華堂、石黒薬店福久屋などと今でも馴染みの店名も描かれてあり、洋風の波を取り入れた当時の勢いを示しています。新政府は又、西洋列強諸国に追い付かんと富国強兵策を推進し、ために前田藩公に替って金沢城内に駐留した歩兵第七連隊と後の第九師団本部共々に訪ずれる家族などの賑わいも充分に町並を発展させるのに役立ったものです。

ただ時代が変わり、人の様相が変化して行こうとも、尾張町に住まいする私等商人の商いに対する飽きない愛着とお客様のためをまず第一に思う「こころ」が失せることはあるまいと思えます。

昭和六十二年二月二十二日 松田平四郎談

松田平四郎氏 略歴

明治四十一年三月九日生。旧制二中を大正十五年三月卒業後、家業一筋に従事し、昭和十八年より松田文華堂十代目を襲名して現在に至る。石川郷土史学会の会員。その格式のある話は尾張町界隈に住む者にとって生き字引である。

おとがき

よく長老と若手との意見の衝突が聞かれますが、私達は自らの経験不足を補うべく、むしろ長老の話に耳を傾けることに喜びを得ている者なのです。今回の小冊子もこうした気持の反映から、松田平四郎氏を囲む場を設けて半日とちりと話を聞き、ここにまとめたものです。読者諸氏のご意見等戴けましたら幸いに存じます。

さて若手会とは尾張町商店街に生まれ育った若手が、愛する街の現状を少しでも改善したいと願う、純粋に自発的な衝動から出発したものです。事実、発足当時(昭和55年)は個々の商店の力は強くとも、商店街としては年々衰退気味であったことは否めず、何かをしなければいけない状況でした。

尾張町商店街に住む若手は、個々の店で営業している仲間を誘い合い、情熱的に行動を起こさんと集まり、会を創った訳です。時には同じ商店街におりながら、話をしたこともなかったという信じられない状況も、まず懇親によるコミュニケーションから出発することで、仲間としてすぐ認め合うようになって行けたのです。

それゆえ、この会は尾張町商店街振興組合から発生したのではなく、まったくの若手による自主的な原動力がもたらしたものであるため、青年部ではなく、「若手会」と胸を張って名乗れるのです。

近年、小間井初代会長・山田2代目会長・高橋3代目会長と徐々に積み上げて来た実績により、尾張町商店街振興組合と共催事業を行うようになりましたが、その本質において若手会は独立しているのです。ただ、店に戻れば尾張町商店街振興組合のメンバーと若手会のメンバーは親子であり、等しく尾張町を活性化させんとする者同志です。お互いが尊重し合いながら、希望を抱いて今後も街創りに取組んで行くものです。

尚、この2月末より尾張町商店街振興組合は山田勝二理事長の下、若手会メンバーも大巾に役員に登用され、若返り活性化致しました。今後の尾張町の個性ある街創りに注目して頂きたいとお願いする次第です。

1987年4月発行

尾張町商店街振興組合

理事長 山田 勝三

尾張町若手会

会長 石野 勝一

金沢市尾張町一丁目1番8号